

令和元年6月18日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02258

研究課題名(和文)大岡昇平と女性読者の関係についての総合的研究

研究課題名(英文)A Study of Ooka Shohei and his Japanese Female Readers

研究代表者

武内 佳代 (TAKEUCHI, Kayo)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：40334560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小説連載を中心として、大岡昇平と三島由紀夫の女性誌での活躍の様相を明らかにしたものである。大岡昇平は、とくに知識階級の女性たち向けの『婦人公論』との関わりの強い作家であることから、当該雑誌を調査・分析し、大岡が連載誌が啓蒙した「女性解放」の文脈を意識的に連載小説に取り入れていたことを解明した。一方、大岡の朋友でもあった三島由紀夫は、そうした大岡の存在を意識しつつも、大岡よりも多種多様な女性誌に連載をしていた。それら雑誌群の調査・分析により、大岡に比べ、三島がそれぞれの連載誌の啓蒙性を意識しつつも、しかしそうした啓蒙性を揶揄・逸脱する試みを連載小説に施していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの大岡昇平研究や三島由紀夫研究で看過されてきた、大岡と三島の、女性読者向けの小説連載の様相を調査し解明したものである。大岡は従来『武蔵野夫人』を除けば、戦争体験を基にした『俘虜記』や『野火』等の小説ばかりが社会的にクローズアップされ、研究の対象ともなってきた作家である。また三島については一般的にも研究においても、文芸誌連載のいわゆる「純文学」としての小説ばかりに焦点が当てられてきた。しかし本研究を通じて、彼らがともに1950年代から60年代にかけて連載女性誌の特色を熟知し、それらを取り入れつつ、女性読者向けに積極的に創作を行ってきた様子を初めてまとまった形で浮かび上がらせた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on novel serialization in women's magazines and examines both the contexts and works by writers Ooka Shohei and Mishima Yukio. Ooka Shohei was deeply involved with Fujin Koron, a magazine primarily for women of the intellectual class. In this study, I examine and analyze Fujin Koron and show that in his serialized novels, Ooka consciously incorporated the idea of "women's liberation" (josei kaiho) that was promoted in the magazine. In contrast, Ooka's friend and fellow writer Mishima Yukio was well aware of Ooka's publications in these magazines and also serialized widely and diversely in them. In the analysis of Mishima's publications, I reveal that, in contrast to Ooka, Mishima was conscious of yet mocked and deviated from the "enlightened" ideas of these magazines in his serialized novels.

研究分野：日本近代文学

キーワード：大岡昇平 三島由紀夫 女性誌 女性読者 婦人公論 戦後日本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本文学研究の分野で女性読者研究の端緒をひらいたのは、女子教育をめぐる社会変容を視座として大正期の女性読者に焦点を当てた前田愛「大正後期通俗小説の展開 婦人雑誌の読者層」(1968)である。その後、本田和子『女学生の系譜 彩色の明治』(1990)を先駆とし、久米依子『「少女小説」の生成』(2013)など、明治・大正期および戦前期から戦後にかけての少女小説における読者共同体の形成とその言説空間に関するまとまった分析が行われるようになった。だがそれらの研究は、「少女」と括られる比較的低年齢の女性読者に注目したものであり、加えて、その対象は日本のいわゆる「戦後文学」にまでは及んでいないと言える。他方、社会学においては近年、木村涼子『“主婦”の誕生』(2010)などが『主婦之友』『婦人公論』を調査し、女性誌が同時代の女性読者に何を啓蒙したかについて解明している。しかし当然のことながら、これらの研究は文学作品を研究対象としたものではない。つまり管見の限り、研究開始当初、日本文学研究の領域において、戦後女性読者についてはいくつかの単発的な論考を除けばまとまった研究成果は見られなかった。そこで、戦後文学の女性読者たちに焦点を当て、文学作品と女性読者たちとの間の交渉の様相を解明する、まとまった研究が必要だと考えた。

(2) 戦後日本の雑誌メディアと文学との関係において、女性読者の存在は極めて重要なものであるが、従来の「戦後文学」の研究においてはその点が看過されてきた。1946年以降、日本では戦後復興の中で、主婦向けを中心に『主婦之友』『婦人公論』『婦人画報』『婦人倶楽部』などの女性誌が次々と復刊され、新たに『女性線』『婦人春秋』『主婦と生活』『婦人文庫』などが創刊された。毎日新聞社の読書世論調査によれば、1948年には雑誌売上げランキングの第二位に『主婦之友』が入り、続いて『婦人倶楽部』『主婦と生活』『婦人世界』というように、第一位の一般総合誌『リーダーズダイジェスト』を除けば、上位五位以内を女性誌が占めていた時期もある。さらに1950年には『主婦之友』がその第一位に躍り出ている。このように女性誌が雑誌メディアの主流をなしていた特異な時代である1950年代は、大衆作家ばかりでなく、大岡昇平や三島由紀夫といったいわゆる「純文学」系の戦後文学作家たちも女性誌にたびたび小説連載を持っており、彼らにとって小説の売り上げや作家としての知名度において女性読者の存在は決して看過できないものだったと考えられる。すなわち著名な戦後文学作家たち、とりわけ大岡昇平や三島由紀夫といった作家たちの創作活動の総体を把握するためには、彼らの小説と女性誌および女性読者との関わりについて解明しなければならないことになる。とりわけ、研究開始当初においては、従来の研究において『虜虜記』『野火』『レイテ戦記』といった戦争体験を基にした小説に議論を集中させ、研究対象が偏りがちだった大岡昇平の女性誌での活躍に目を向けることの意義が極めて大きいと考えた。また、大岡と懇意にしていた三島由紀夫もまた、数々の女性誌を賑わせたにもかかわらず、文芸誌連載か書き下ろしの小説作品にばかり注目が集まってきたという大岡との共通性を持った作家であることをふまえ、大岡との比較対象として三島にも同様に目を向け、彼らの女性誌連載について同時並行的に資料調査と考察を行っていく必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、1950年代から1960年代にかけての大岡昇平と女性読者の関係について、戦後の社会・メディア・文壇の変容と連関において、それがどのようなものであったかを解明するものである。戦後の女性誌を主な調査対象とし、大岡昇平による女性誌連載小説と、同誌の記事や読者投書の映し出す女性問題との影響関係を調査・分析し、大岡が「女性が読むこと」にどう関わったかを究明する。それにより、大岡昇平の女性読者向けの作家活動という新たな側面を掘り起こすことを目的とする。

(2) 本研究ではさらに、大岡昇平との比較対象として、同時期に活躍し、作家仲間として女性誌連載についても互いに情報をやりとりしていた三島由紀夫についても、上記と同様の内容を究明することを目的とする。

(3) 以上のように大岡昇平と三島由紀夫の連載小説と女性誌メディアとの関わりを調査・考察することによって、女性誌メディアがどのように彼ら戦後男性作家の創作活動に影響を与えたかの一端を明らかにし、従来の日本文学研究で看過されてきた戦後文学と女性読者の関係を掘り起こすことを、全体の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 全集の目録・解題などを参考に、大岡昇平および三島由紀夫の女性誌における連載小説もしくは評論・エッセイ・座談会の全仕事について各掲載誌名や発表年月日などを網羅的に整理した。そのうえで、全集に所収されている文献についてはすべて目を通し、彼らの女性誌での言説を参考にしながら、とりわけ重要だと思われる連載小説を研究対象として決めていった。

(2) 上記(1)の作業をふまえてさらに、国立国会図書館や専門図書館を利用したり、あるいは個人的に雑誌の現物を収集・利用したりしながら、大岡および三島が1950年代から1960年代にかけて小説連載を行った女性誌(月刊・週刊)の連載誌面や読者投書欄、また併載されてい

た誌面記事をくまなく調査し、重要な個所については文献複写をし、資料収集を行っていった。そのうえで、それら文献資料の内容の関連性から、大岡および三島の女性読者向けの小説作品と同時代の女性問題などとのつながりを考察していった。

4. 研究成果

(1) 本研究では、大岡昇平の女性誌での仕事の詳細な整理から始めたが、まずその整理から大岡が1950年の『武蔵野夫人』による女性読者を中心としたベストセラー以降、1950年代から70年代初頭にかけて継続的に女性読者向けに小説連載をしていることがわかった。

具体的には、1953年に『黒い太陽』という長編小説を主婦向けの雑誌『婦人倶楽部』(9-12月号)で連載したのを皮切りに、1954年から翌年にかけては『漂う湖』(『主婦と生活』11月号-翌年7月号)、1957年には『雌花』を『婦人公論』(1-12月号)、1959年には『夜の触手』(『女性自身』5月29日-9月9日号)を連載している。この期間で一見空際に見える1956年にしても、『神戸新聞』(6-12月)に『午後の誘惑』という、女性読者を狙ったとおぼしき中間小説の連載が見られる。1960年代に入ると、同様に主に女性読者層を狙ったと考えられる新聞連載がある。1961年の『朝日新聞』夕刊(6月~翌年3月)連載の『若草物語』(単行本化の際『事件』と改題)と、1969年の『毎日新聞』夕刊(1-12月号)連載の『愛について』である。この間、大岡は『婦人公論』で1961年から翌年にかけて読者投書欄の「文章」で選評者を務め、1965年から1969年にかけて女流新人賞の選者も務めている。そして1970年には大岡にとって最後の女性誌連載小説となる『青い光』を同じく『婦人公論』(1月~翌年9月号)に連載している。

ここからわかったのは、第一に、1950年代から60年代の大岡昇平の作家活動を考える上で、女性誌や女性読者との関わりは決して無視できないものとしてあるということであり、とりわけ『雌花』の連載に始まる比較的知識人女性向けの『婦人公論』という女性メディアと大岡との密接なつながりを解明する必要があるということだった。

(2) 姦通小説である『武蔵野夫人』の1950年のベストセラーは、戦後女性読者の間で大岡の知名度を一気に高めたことで知られる。本研究を通して、その『武蔵野夫人』につぐ姦通小説として鳴り物入りで『婦人公論』に登場したのが、上記の『雌花』だったことを明らかにした。大岡文学としては現在では忘れ去られた感のある『雌花』は、大岡のちに『婦人公論』と深い関わりをもつ端緒となった連載小説であり、同時代には映画化もされ話題を呼んだ。本研究では、連載誌の誌面調査や小説テキストそのものの分析、そして三島の同時代の連載小説との比較によって、この『雌花』という小説が、『婦人公論』が啓蒙していた女性の離婚をめぐる戦後の「女性解放」の文脈やその法的な問題を積極的にモチーフとして採り入れていたことを解明した。加えて、そうした試みであるにもかかわらず、同時期に同じく「よるめき」ブームの一翼を担った姦通小説としてベストセラーとなった三島の『美德のよるめき』に比して、『雌花』の評判や売れ行きが芳しくなかったことについては、大岡自身がのちに「失敗作」と定位したように小説の結構そのものに問題があることも考察した。途中、家族の介護の必要が生じ、当初の予定どおりには研究が進まず、大岡の女性誌連載の仕事を通時的に調査・分析するまでにはいたらなかったが、しかし『雌花』と『婦人公論』との関わりに関する研究により、従来光が当てられてこなかった大岡昇平文学の新たな側面を可視化することができた。これらの成果については、平成28年10月の日本近代文学学会秋季大会(於・福岡大学)で口頭発表を行い、さらに平成31年3月に学術誌に論文を発表した。

(3) 大岡昇平との比較対象としての三島由紀夫についても女性誌での小説連載について調査してみたところ、大岡に比べて数多くの作品を、大岡よりも多種多様な女性誌に連載していることが判明した。三島由紀夫は、女性誌連載としては1950年に『純白の夜』という小説を『婦人公論』(1-10月号)に載せたのを皮切りに、その後、50年代から60年代にかけて『主婦の友』『婦人倶楽部』『婦人朝日』『若い女性』『マドモアゼル』『女性自身』『女性セブン』といった様々な女性読者層を擁する女性誌に小説連載を行っている。本研究では、できる限りこれらの女性誌誌面と三島の連載小説の内容との関わりを調査・分析することによって、それぞれの連載小説(あるいは掲載された戯曲)が、女性誌面が打ち出していた女性問題をめぐる啓蒙的言説を意識的に採り入れつつも、しかしそうした言説を逸脱する要素を併せ持っていることを明らかにした。ただし読者の反応なども調査したところ、そうしたいわば女性誌の啓蒙的言説を裏切る要素は、必ずしも女性読者にまで届いていたとは言えないこともわかった。とはいえ、大岡よりも多種多様な女性誌に多くの小説を連載してきたその三島の女性読者向けの創作活動は、従来文学研究や評論などにおいて注目されてきた、いわゆる三島の「主流」とされる小説作品の内容にも色濃く反映していることも比較・考察によって解明できた。これらの成果については、平成27年10月の国際三島由紀夫シンポジウム(於・東京大学駒場キャンパス)や平成30年8月のメディアとジェンダー研究会(於・日本大学文理学部)で口頭発表を行った。また、平成28年に研究アンソロジー本である『混沌と抗戦 三島由紀夫と日本、そして世界』(水声社)および学術誌に論文を発表し、同年から平成30年にかけて雑誌・古書などの学術専門誌『日本古書通信』に小振りながら論考を断続的に発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

- 武内 佳代、「大岡昇平『雌花』と『婦人公論』 姦通小説ブームのただなかで」、語文、査読有、163巻、2019、pp. 18-32
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『婦人朝日』 『女神』の憂鬱」、日本古書通信、査読無、83巻4号、2018、pp. 16-17
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『マドモアゼル』 『肉体の学校』へようこそ」、日本古書通信、査読無、82巻11号、2017、pp. 14-15
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『婦人画報』 「優雅」な女賊黒蜥蜴」、日本古書通信、査読無、82巻9号、2017、pp.4-6
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『若い女性』 『お嬢さん』の 幸福な結婚」、日本古書通信、査読無、82巻6号、2017、pp.14-15
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『婦人倶楽部』 婚約不履行時代の『永すぎた春』」、日本古書通信、査読無、82巻5号、2017、pp.14-15
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『主婦之友』 都市の 純愛 物語」、日本古書通信、査読無、82巻3号、2017、pp.10-11
- 武内 佳代、「三島由紀夫と『婦人公論』 早すぎた姦通小説」、日本古書通信、査読無、81巻12号、2016、pp.9-11
- 武内 佳代、「『女性自身』のなかの『三島由紀夫レター教室』 女性誌連載という併走」、語文、査読有、156巻、2016、pp. 22-39

〔学会発表〕(計3件)

- 武内 佳代、「三島由紀夫『複雑な彼』論への助走」、メディアとジェンダー研究会、2018年8月19日、日本大学文理学部(東京都世田谷区)
- 武内 佳代、「離婚のすすめ 大岡昇平『雌花』と『婦人公論』」、2016年度 日本近代文学会秋季大会、2016年10月16日、福岡大学(福岡県・福岡市)
- 武内 佳代、「三島由紀夫と女性誌」、国際三島由紀夫シンポジウム2015(国際学会)、2015年11月15日、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)

〔図書〕(計1件)

- 武内 佳代 他、水声社、『混沌と抗戦 三島由紀夫と日本、そして世界』、2016、pp. 263-272

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。